

## 4-6 科学技術社会論

### 研究・教育活動の概要と特色

経済発展の目覚ましい東北アジア地域の環境エネルギーに関わる諸問題および地球環境問題（地球温暖化問題、越境酸性雨問題、オゾン層破壊問題、捕鯨問題）などに関して、政治経済学や社会学などの社会科学的手法を用いた研究を行っています。特に、1) 地球温暖化対策（税、排出量取引、規制、補助金）や政府開発援助（ODA）などの環境エネルギー分野での国内対策や国際協力の仕組み、2) 2013年以降の温暖化問題の国際的枠組みの検討、3) 科学技術政策と社会との関係のあり方、4) 国際漁業資源管理に関する意思決定を説明する理論構築、効果性評価、制度的相互連関に関する分析、などに関して具体的な政策を提言しています。地域間や国家間にある問題を多角的に研究することによって、国レベル、地域レベル、そして地球レベルの様々な安全保障体制の強化に貢献できればと思っています。

### I 組織

#### 1 教員数（2013年7月末現在）

教授：1

准教授：1

講師：0

助教：0

教授：明日香壽川

准教授：石井敦

#### 2 在学生数（2013年7月末現在）

学部 (2年次以上)	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生
0	0	0	0	1

### 3 修了生・卒業生数（2009～2013年度）

年度	学部卒業生	大学院博士課程 前期修了者	大学院博士課程 後期修了者 (含満期退学者)
09	0	0	0
10	0	0	0
11	0	0	0
12	0	0	0
13	0	0	0
計	0	0	0

\* 2013年度は、7月末までの数字

## II 過去5年間の組織としての研究・教育活動（2009～2013年度）

### 1 博士学位授与

#### 1-1 課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
09	0	0	0
10	0	0	0
11	0	0	0
12	0	0	0
13	0	0	0
計	0	0	0

\* 2013年度は、7月末までの数字

#### 1-2 博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

### 2 大学院生等による論文発表

#### 2-1 論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
09	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0

11	0	0	0	0	0
12	0	0	0	0	0
13	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0

\*2013年度は7月末までの数字。ただし、以後の掲載が決定しているものも含む。

## 2-2 口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
09	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0
11	2	0	2	0	0
12	0	0	0	0	0
13	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0

\*2011年度は9月末までの数字。ただし、以後の発表が決定しているものも含む。

## 2-3 上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

### (1) 論文

なし

### (2) 口頭発表

なし

## 3 大学院生・学部生等の受賞状況

なし

## 4 日本学術振興会研究員採択状況

2人

## 5 留学・留学生受け入れ

### 5-1 大学院生・学部学生等の留学数

なし

### 5-2 留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
09	0	0	0
10	0	0	0
11	0	0	0
12	0	0	0
13	0	0	0
計	0	0	0

## 6 社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
09	0	0	0
10	0	0	0
11	0	0	0
12	0	0	0
13	0	0	0
計	0	0	0

## 7 専攻分野出身の研究者・高度職業人

### 7-1 専攻分野出身の研究者

なし

### 7-2 専攻分野出身の高度職業人

なし

## 8 客員研究員の受け入れ状況

なし

## 9 外国人研究者の受け入れ状況

なし

## 10 刊行物

なし

## 11 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

なし

## 1.2 専攻分野主催の研究会等活動状況

なし

## 1.3 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

科学技術専攻分野は、地球温暖化、越境酸性雨問題、オゾン層破壊問題、捕鯨問題などの広域にわたる環境問題に関して、科学技術政策と社会との関係のあり方という側面から、学術研究の成果に基づいた具体的な政策提言を行ってきた。すなわち、研究者という立場から、社会に対して積極的にメッセージを発してきた。学生に対しても、そのような社会との関わりを大切にするように指導しており、これからも続けていきたいと考えている。

## III 教員の研究活動（2009～2013年度）

### 1 教員による論文発表等

#### 1-1 論文

明日香壽川, 2013, 「地球温暖化問題「復活」の条件: IPCC 第5次報告書と今後の温暖化対策の展望」(上・下) 『世界』, 岩波書店, 2013年12月号 (p.225-231), 2014年1月号 (p.232-241) .

Jim Skea, Stefan Lechtenböhmer & Jusen Asuka, 2012. "Climate policies after Fukushima: three views", *Climate Policy*, Volume 13, Supplement 01, March 2013, pages 36-54.

明日香壽川, 2011, 「崩壊する日本の温暖化対策」 『世界』, 岩波書店, 2011年3月号, p.57-66

明日香壽川, 2011. 「2013年以降の気候変動対策国際枠組み: 葉山プロポーザル」 『クライメートエッジ』 2011年12月号 (Vol.11), P.1-6, 2011年12月2日発行.

明日香壽川, 2011. 「京都議定書第二約束期間不支持3カ国の分析」 『クライメートエッジ』 2011年7月号 (Vol.10), P.1-3, 2011年7月25日発行.

Asuka, Jusen; Li Zhi Dong and Lu Xiang Chun. 2010. What constitutes meaningful participation from China?: An analysis of the Chinese intensity targets. 22. Hayama, Japan. Institute for Global Environmental Strategies. Discussion paper No.3

ASUKA Jusen and LU, Xiangchun. 2010. Quantified emissions reduction

target of China: Assessing the Chinese target of 40-45% reduction in CO2 intensity. 4. Hayama, Japan. Institute for Global Environmental Strategies. Discussion paper No.5

明日香壽川, 2010, 「途上国の数値目標をどう考えるか」『エネルギー・レビュー』, 30(4), pp.20-23

明日香壽川, 2010, 「排出量取引と国際競争力—EU、米国、豪州における対応」『経済セミナー』, 652, pp.38-43

明日香壽川, 李志東, 盧向春, 2010, 「COP15 に向けて中国の意味ある参加とは?—中国政府が掲げる温暖化対策の目標と「低炭素発展」のシナリオを読み解く」『世界』, pp.92-103

明日香壽川, 山本政一郎, 朝山慎一郎, 2010, 「遠藤小太郎ほか論文『極地の氷の融解と海面水位変動に見る環境情報の伝達問題』の中の誤解について」『日本金属学会誌』, 74(1), pp.61-63

明日香壽川, 片岡直樹, 大塚健司, 相川泰, 2009, 「技術移転は見果てぬ夢(impossible dream)か?」『中国環境ハンドブック 2009—2010 年版(中国環境問題研究会編)』, pp.94-101

明日香壽川, 2009. 「日本政府によるカーボン・クレジット活用策の比較評価および発展経路」『環境経済・政策研究』(第2巻第1号, 2009年, 岩波書店)

石井敦

Shinichiro Asayama, Atsushi Ishii 「Reconstruction of the boundary between climate science and politics: The IPCC in the Japanese mass media, 1988-2007」, *Public Understanding of Science*, 掲載確定

Hélène Trudeau, Isabelle Duplessis, Suzanne Lalonde, Thijs Van de Graaf, Ferdi De Ville, Kate O'Neill, Charles Roger, Peter Dauvergne, Jean-Frédéric Morin, Sebastian Oberthür, Amandine Orsini, Frank Biermann, Hiroshi Ohta and Atsushi Ishii 「Insights from Global Environmental Governance」, *International Studies Review*, 15巻4号, pp.562-589, 2013

石井敦「生物多様性における科学と政治—サメ類の資源管理を事例に—」, 『生物多様性をめぐる国際関係』, 毛利勝彦, 大学教育出版, 19~43頁, 2011

石井敦「捕鯨問題の「見取り図」」『解体新書「捕鯨論争」』, 石井敦, 新評論, 3~63頁, 2011

佐久間淳子, 石井敦「マスメディア報道が伝える「捕鯨物語」」『解体新書「捕

- 鯨論争』』、石井敦、新評論、147～200 頁、2011
- 石井敦、大久保彩子「日本の捕鯨外交を検証する」『解体新書「捕鯨論争」』、石井敦、新評論、247～283 頁、2011
- Atsushi Ishii, Oluf Langhelle 「Toward policy integration: Assessing carbon capture and storage policies in Japan and Norway」、*Global Environmental Change*、21 卷 2 号、pp. 358-367、2011
- Jennie C. Stephens, Nils Markusson, Atsushi Ishii 「Exploring framing and social learning in demonstration projects of carbon capture and storage」、*Energy Procedia*、4 卷、pp. 6248-6255、2011
- Nils Markusson, Atsushi Ishii, Jennie C. Stephens 「The Social and Political Complexities of Learning in CCS Demonstration Projects」、*Global Environmental Change*、21 卷 2 号、pp. 293-302、2011
- Atsushi Ishii 「Scientists Learn not only Science but also Diplomacy: Learning Processes in the European Transboundary Air Pollution Regime」、『Governing the Air: Science-Policy-Citizens Dynamics in International Environmental Governance』、Rolf Lidskog, Göran Sundqvist、MIT Press、2011
- 大久保彩子、真田康弘、石井敦「鯨類管理レジームの制度的相互連関：分析枠組みの再構築とその検証」、『国際政治』166 号、日本国際政治学会、2011
- 朝山慎一郎、石井敦「地球温暖化の科学とマスメディア：新聞報道による IPCC 像の構築とその社会的含意」、『科学技術社会論研究』9 号、科学技術社会論学会、70～83 頁、2011
- Atsushi Ishii、Ayako Okubo 「Japan Has No Whaling Heritage to Preserve」、『Opposing Viewpoints: Japan』、Karen Miller、Greenhaven Press、pp. 95-101、2009

## 1- 2 著書・編著

明日香壽川

明日香壽川『中国環境ハンドブック 2011-12』[蒼蒼社,(2011)](共著)

明日香壽川『地球温暖化 ほぼすべての質問に答えます！』（岩波ブックレット）[岩波書店,(2009)]

明日香壽川『中国環境ハンドブック 2009-10』[蒼蒼社,(2007)](共著)

明日香壽川『10年後の中国：65 のリスクと可能性』, p.262-286, 講談社. (共著)

明日香壽川, 2009. 『環境リスク管理のための人材養成プログラム』, pp.73-107, 大阪大学出版会.2009

石井敦

Nils Markusson, Atsushi Ishii, Jennifer C. Stephens (2012) “Learning in CCS demonstration projects: social and political dimensions.” In Nils Markusson, Simon Shackley, Benjamin Evar (eds.) *The Social Dynamics of Carbon Capture and Storage: Understanding CCS Representations, Governance and Innovation*. Routledge, pp. 222-244.

石井敦『解体新書「捕鯨論争」』（編著）、新評論、2011。

### 1- 3 翻訳、書評、解説、辞典項目等

なし

### 2 教員の受賞歴（2009～2013 年度）

なし

## IV 教員による競争的資金獲得（2009～2013 年度）

### （1）科学研究費補助金

明日香壽川

基盤研究（C）「排出量取引制度が企業の国際競争力に与える影響の分析（平成 22-24 年度）金額 120 万円（平成 22 年度および平成 23 年度）

基盤研究（C）（2）「コスト効果性を中心とした日本政府温暖化施策の総合的評価」（平成 19-21 年度）金額 130 万円（平成 19 年度）

石井敦

若手研究（B）「炭素隔離技術のマスメディア報道に関する定量的・定性的研究」（平成 22-23 年度）（平成 22 年度は 90 万円）

若手研究（B）「炭素隔離技術に関する国際的技術アセスメントの有効性評価とその要因分析に関する研究」（平成 20-21 年度）金額 156 万円

## V 教員による社会貢献（2009～2013 年度）

明日香壽川



(社) 海外環境協力センター理事 (2007 年～)  
環境省：国内排出量取引検討会委員 (2008 年～)  
環境省：中央環境審議会地球環境部会気候変動国際戦略専門委員会委員  
(2004 年～)  
日本カーボン・オフセット・フォーラム・アドバイザー (2008 年～)  
環境省：国内排出量取引制度検討会委員 (2008 年～2010 年)

石井敦

環境省：越境大気汚染対策に係る地域協力の推進方策に関する検討会検討委員  
(2011 年度～)  
環境省：EANET 発展戦略に関する懇談会検討委員 (2009 年度～2011 年度)

## Ⅵ 教員による学会役員等の引き受け状況 (2009～2013 年度)

明日香壽川

中国環境問題研究会代表 (2004 年～)  
環境経済・政策学会理事 (2012 年～)  
国際アジア共同体学会理事 (2007 年～)

石井敦

環境経済・政策学会理事 (2012 年～2013 年)

## Ⅶ 教員の教育活動

### (1) 学内授業担当 (2013 年度)

#### 1 大学院授業担当

明日香壽川

- 1 学期、文学研究科，科学技術論特論 (2 単位)
- 1 学期、文学研究科，科学技術論研究演習 (2 単位)
- 1 学期、ヒューマンセキュリティプログラム，“Environmental Security and Energy Security” (2 単位)
- 2 学期、環境科学研究科，地域環境・社会システム学概論 (2 単位)
- 通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学修士セミナー (4 単位)
- 通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学修士研修 (6 単位)
- 通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学博士セミナー (6 単位)
- 通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学博士研修 (8 単位)

石井敦

通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学修士セミナー（4 単位）

通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学修士研修（6 単位）

通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学博士セミナー（6 単位）

通年、環境科学研究科，地域環境・社会システム学博士研修（8 単位）

## **2 学部授業担当**

明日香壽川

（全学教育：学部生対象）前期，自然論，「科学技術とエネルギー」（2 単位）

石井敦

（全学教育：学部生対象）後期，自然論，「環境外交における科学と政治」（2 単位）

## **3 その他**

### **（2）他大学への出講（2009～2013 年度）**

明日香壽川